

## 独立伝道者の生活問題

黒崎幸吉

「何を食ひ、何を飲まんと生命のことを思い煩ひ、何を着んと体のことを思い煩うな」とは、すべての人に与えられたイエスの教訓であつて、この点は伝道者たる否とに關係がない。

しかしながら一般の人は失業せる場合の外は、何か一つの職業を持つており、あるいは俸給によりて衣食し、あるいは農商工業により生計を立て、多かれ少なかれ収入の道が開かれているのであり、また同じく伝道者であつても教会の牧師は教会より俸給を得、寺院の僧侶は寺の財産によりて衣食することができ、これに反して無教会主義の伝道者のごとくに一定の俸給もなく、またその他の収入を生ずべき業務に従事しない人々にとりては生活問題は非常に困難な問題となつて来るのである。

ここに困難な問題と言つたのは彼らが生活ができなくなるという意味ではない。空の鳥をすら養ひ給う神が、一伝道者の家族を養ひ給わないはずはない。この意味において独立伝道者は一切心配無用である。たとい三、四日は食をとり得ないほど貧しい

境遇に陥ることがあつても、神は必ず彼らを養ひ給うことを信じて行くべきであり、またかく信じて少しも違算がない。

問題は独立伝道者が餓死せずすむや否やではなく、伝道者の品位を保つためには、生活問題をいかに考うべきかの点に存する。

解りやすいように具体的に説明するならば、例えばここに独立伝道に従事している一人があるとする。彼は無教会主義者の多くがなすごとく、集会を開き、雑誌を発行し、著書を刊行する。もし不幸にして彼の集会に人が集まらず、彼の雑誌や彼の著書が売れないならば、彼には全く収入の途がないのである。

かかる状態に立つ場合、外部の人々は彼に対していかなる態度に出るかが重大なる問題である。

(一)ある人々は、彼は伝道者たる資格なしとして全然彼を顧みないであろう。(二)またある人は、彼の伝道者としての価値を認めないけれども、彼の決心を壮とし、彼の貧困を憐みて彼に援助の手を伸ばすであろう。(三)またある人は、伝道者としての価値とか資格とかを問題とせず、とにかく伝道は大切な仕事故これを援助する義務ありと感じてその手

を差し出すであろう。(4)またある人は、彼の人格や信仰を尊敬し、たとい全世界の人が彼を無視するとも、それに関わりなく彼の伝道のために金銭を献げて彼の伝道を全うせしめようと努力するであろう。

(1)の場合、すなわち誰も彼を願みず、伝道者としての彼を援助せざる場合、彼は餓えなければならぬ。もし彼が確かに神の命によりて福音を宣べ伝えていと信ずるならば、換言すれば朝より夕に至るまで神の御声が心の耳にひびき、一刻も福音を宣べ伝えずにいることができないならば、彼はたとい餓えても福音の宣伝をやむべきではない。彼は声からすまで福音を宣べ伝えつつ路傍に餓死することが彼の光榮ある討死である。

しかしながらもし彼がかかる切迫せる神の声を感ぜないならば、宜しく自己の肉体の生命を保ち、家族の生命を維持し、無益に人に依頼せざる方法を講ずべきである。「人もし働くことを欲せずば食すべからず」、パウロすらも「働なしに人のパンを食せず……労と苦難とをもて夜昼はたらいた」(テサロニケ下三・七、八)。先ず自己及び家族の生活を維持する方法を講じつつ福音を宣べ伝えることは決し

て恥ではない。人に憐憫を乞うに比して遊かに優っている。一方に人に憐憫を乞いつつ、他方に権威ある福音を伝えることは不可能である。

(2)の場合、すなわち人が彼の伝道者としての価値を認めないけれども彼の困窮に同情し、人間として彼を援助せんとする場合は、いかなる態度をこれに對してとるべきであろうか。キリスト者は互いに相援け合うのが当然であり、困窮せる兄弟がある場合、富める者がこれを援助することはキリスト者としては当然である。従つてかかる場合、その愛の贈り物を受けることは何等の罪ではない。しかしながらこれは一人の人間としての場合であつて、伝道者としては自ら問題は別である。

人の憐憫を受けて生活すること、伝道とは両立することができない。伝道者は神の使者である。神の権威をもつて人に臨まなければならない。もし彼にして人の憐憫の下に生活しておるならば、もはや権威をもつてこれに臨むことができない。憐憫を受けることと権威を持つこととは両立し得ないからである。

それ故にもし彼があくまでも伝道者として立つことが自分の使命であると信ずるならば、いかなる場

合においても人の憐憫の下に在つて生活をつづけてはならない。もし人の憐憫によりて生活せざるを得ざる場合に立ちいたるならば、彼はその伝道を中止するか、もしくは憐憫を辞退して潔く餓死しなければならぬ。しからざれば、彼は(1)の場合と同様、自ら働きてその生活を維持し、独立の人間としてその余の時間を福音の宣伝に費すべきである。

(3)の場合、すなわち伝道そのものに対する尊敬より、彼の生計を援助せんとする人がある場合、彼はこれを受け、これによりて生計を維持しつつ伝道して差し支えがない。その故はかかる人の献げ物はこの貧しき伝道者を憐れむ心からその人に対してなさるのでなく、神の福音を尊む心から神に対してなさるのであるからである。しかしながらこの場合、彼(伝道者)の考うべきことは、果たして自分はこのことによりて衣食しつつ伝道するの資格有りや否やの点である。神の聖召を信じて伝道することは結構であるが、時には謙遜の心をもつて自己を反省し、神の召しと信じていることが、あるいは自己の主観の迷妄にあらざるやを検討することは、正しき態度である。しかして自らその資格なしと感ずる場合には、宜しく神に向かつて辞職を申し出さずべきで

ある。けだしこの献げ物は彼なる一個人を目標としたものではなく、伝道なる仕事を目標としているのである故、その献げ物を受くる資格の有無が彼に残された問題であるからである。

(4)の場合、すなわち彼の人格とその信仰とを尊敬し、是非彼によりて福音が宣べ伝えられんことを願ひ、またそれが神の御旨であると信じて彼を援助する場合であるが、この場合は勿論これを受けこれによりて衣食しつつその伝道を続けて行くべきである。これはいささかも恥ずべきことではない。

\*

パウロは「誰か己れの財にて兵卒を務むる者あらんや……もし我ら靈の物を汝らに蒔きしならば、汝らの肉の物を刈り取るは過分ならんや。もし他の人汝らに対してこの権あらんには、まして我らをや」(1コリント九・七、一一、一二)と唱え、神の使徒たる者がその信徒より肉の物すなわち生活の資料を受くる権があることを主張している。

汝ら知らぬか、聖なる事を務むる者は宮のものを食し、祭壇に事うる者は祭壇のものに与るを、かくのごとく主もまた福音を宣べ伝うる者の福音により

て生活すべきことを定め給えり(Ⅰコリント九・一三、一四)。

この原則は確かに真理である。しかしながら福音を宣べ伝えてさえいれば、どんな場合でも物質的報酬を要求するの権があるということはできない。パウロが上掲の言葉を送ったコリントの教会はパウロの伝道によりて出来上がったものであった。「汝らは主に在りてわが業ならずや、われ他の人には使徒ならずとも汝らには使徒なり、汝らは主にありて我が使徒たる職の印なればなり」(Ⅰコリント九・一、二)と言いうるとき関係にあつた教会であればこそ、パウロはその教会によりて養わるる権を有していることは当然であつた。ただ伝道さえしていれば何人からでも養われる権利があると考えるはならない。

教会や伝道局から俸給を貰っている牧師にはこの問題は起らない。けれども、教会もなく、俸給もなく、ただ口と筆とをもつて伝道している無教會的独立的伝道者には常にこの問題は附随してくる。しかしてこの問題を軽々に考えることは、結局その伝道そのものを罪の行為たらしむるゆえである故に、非常に注意しなければならない。

私の考えとしては、無教會的信仰は、本来牧師階級の存在を必要とせず、すべてが平信徒であり、すべての平信徒が皆祭司であり、牧師であることの立場をとつていのである以上、できるだけ普通の職業を持ち、普通の生活をなし、その生活を通し、またその余暇に主の導きに従つて福音を宣べ伝うべきであると思う。しかしながら、キリストに強いられて止むにやまれない場合、その職業を棄てて熱心伝道に従事することも必要である。かかる場合が絶無であるというのではない。要は主イエスが果たして自分を要求し給うか、果たしてすべての職をすてて伝道に従事することが、真に自己に対する神の命令であるかを謙遜なる心持ちをもつて考うべきである。あるいは宗教問題に関する一種の趣味より、あるいは伝道者の英雄的生活に対する淡き憧憬より、あるいは信仰のために職を失えるごとき場合の興奮より、あるいは入信当時の一時的感激等より伝道に献身するというようなことは、よほど慎まなければならぬことであると思う。

\*

以上は伝道者自身の態度であるが、信者が伝道者に対していかなる態度を取るべきかということもま

た重大な問題である。教会のごとき組織体においては、ちようど国民が国家に租税を納むると同様に、教会費を納付していること故、問題はないけれども、独立伝道者にはかかる組織がない。それ故に彼らによりて導かれし信者はこの点に対して充分に考慮しなければならぬ。

第一に独立伝道者に導かれて信仰に入りし者、またはその信仰を養われている者はその与えらるる信仰の糧に対して感謝の心を持ち、その感謝に相当する物質的報恩を忘れないようにしなければならぬ。僅かに二、三十銭の雑誌代や聴講料をもつて天国の入場券を買い取りうるような心持ちをもつてはならない。初代のエルサレムの信徒は、その信仰に入つた喜びの余り、自己の所有財産を売り払つて使徒の足下に置いたほどであつた。もし今日の信徒が自己の救われしことにつき、眞の感謝の思いを持つならば、自分に靈の糧を運んでくれる伝道者に対してどんなに感謝しても感謝し切れるはずのものではない。

第二に伝道者に対し、神の使としての尊敬を持つことが必要である。もちろん伝道者の人格や行為が尊敬に値していない場合は止むを得ないけれども、

貧困と戦いつつ神の福音を宣べ伝えんとするその心に対して充分なる敬意を持たなければならぬ。もし信者にしてこの敬意を持つならば、その伝道者を困難の中に放置して、これを顧みずにいることはできないはずである。教会の金持執事は、その牧師を自分の雇人のごとくに軽蔑の目をもつて見、これに対して何らの敬意を持たないということ聞いたことがある。この態度を無教會的独立伝道者の上に移されてはたまつたものではない。

しかしてこの尊敬と同時に愛を持たなければならぬこともまた当然である。パウロは父のごとき心持ちをもつてその信者を愛した。伝道者がその靈の子供を愛することは、親の子に対する愛にまさるとも劣らない。それ故に靈の子供はまたその父に対して愛をもつて報いなければならない。

「御言を教えらるる人は教うる人とすべての善き物を共にせよ」(ガラテヤ六・六)。伝道者に対する尊敬と愛を持つ場合、この物質によるコイノーニヤは必ず実現するのである。これが御言を教えらるる人の大切な務めである。

第三に信者は独立伝道者に対し憐憫の心をもつて対してはならない。氣の毒だから雑誌をとつてやる

うとか、可哀そうだから献金をしてやろうというような心持ちが起こつても、かかることをしてはならない。もしこの『永遠の生命』誌に対して、かかる心持ちでこれを求めておらるる方があるならば、その好意は感謝にたえないけれども、この雑誌の性質上、それだけはお断わりしなければならぬ。いくら読者が少なくとも、いかに会員が少数でも、それが神のお仕事であると信じている以上、人間の憐れみの下に立たしめることはできない。

伝道者の貧困を見てこれを憐れんで助けることは、伝道者にとりては甘き誘惑となり、信者にとりては高慢の心を芽生えしめる大いなる危険となる。いずれの方面より見てもこれは絶対に避けなければならぬ。

要するに無教會的伝道者と無教會的信者とは、ここに一種独特の試練の下に立たしめられていることとなる。すなわち、神はこの両者に対して「信仰に立て」と命じ給う。伝道者も信者も共に純粹に信仰に立ち、この問題を解決しなければならぬ。そこに人情や情実によりて左右せらるるところがあつてはならない。伝道は神の聖なる御業である。この場面に關する限り、伝道者も信者も共に神によりて直

接に審かるる地位に立つていることを意識しつつ、この問題を解決しなければならぬ。

(『永生』一三四号、一九三七年四月)

### 平信徒伝道について

黒崎幸吉

ブルンナー博士は日本全国を巡回して、しきりに平信徒の伝道を奨励して行かれたようであるが、私ももちろんこれには賛成である。

殊に無教會としては賛否の問題ではなく、平信徒伝道以外に全く途がないのであるから、賛否どころの騒ぎではない。われわれ専門に伝道に従事している連中も、皆悉く平信徒でありいわゆる素人である。その他職業を持ちながら伝道に力をつくしている無教會人が多いのであるが、それらも皆素人であることはもちろんである。

元來教會としては素人伝道を好まなかつた。殊にカトリック教會では、宗教上のこと、信仰上のこと

はすべて法王とその属僚に権力を持たせているのであるから、平信徒はただ彼らに従うべきであり、自ら教える地位に立つべきではない。それ故、平信徒にとつては立ち入って聖書を研究することすら奨励されなかつたのであつた。そしてカトリック教会では説教は重要な地位を占めていないので、平信徒の公的伝道の機会はないこととなる。

プロテスタント教会でも教職と平信徒との間には種々の区別が立てられ、平信徒や無資格教師は洗礼や聖餐を司ることまたは礼拝説教をすることができない等としているのが普通である。その理由とするところは、恐らく平信徒は信仰のことに熟達せず、誤つた教理を伝えることによつて、会衆を誤らせることを心配するのと、また洗礼や聖餐等の式は特に神によつて選ばれ、按手礼によつて特に任命された人のみの特権として保とうとしたためであろうと思ふ。

以上のような制限を除けば、プロテスタント教会では平信徒が多くの場合、その教会の伝道に協力していることは事実であり、またこれが教会に多くの益を与えていることも事実である。ただそれが無教会の場合と異なり、牧師の活動に対する補助である

という性格が常に附随しているために、その活動が不十分であるということは言いうることであろう。

これに反し、無教会ではすべてが平信徒である故、その中の誰も他の人を伝道者に任命する資格も権威もなく、またかかることの必要をも感じない。すべてを神に委せ、神が適當なる人物の心に聖靈を降し、これによつて伝道に挺身するに至るのにまかせている次第である。そしてそれらの人が専門に伝道に従事するか、または職業に従事しつつ伝道に協力するかは重大なる問題ではない。

カール・ハイム教授が一九二二年頃日本に來た時、内村先生に逢い、互いに肝胆相照して語られたようであつたが、ただ同博士にとつて不可解な一つの点は、内村先生があれだけ大きい集会を持ち、あれだけ多くの雑誌の読者を持ちながら、何故にその後継者を造つて置かないかという点であつた。同様に日本の多くの教役者も、無教会主義は内村先生の逝去と共に消滅するであろうと考え、かつ唱えたのであつた。否、現に最近東京で開かれた新教伝道九十年記念会に陳列された説明図の中にも、無教会主義は内村先生の死と共に消滅している由である。

(これは間接に人づてに聞いたのであるから詳細の点は精確には知らない。)

しかるに事實は決して消滅せず、今日は全国的に無教會的集會の数は非常に多くなつており、内村先生の播いた種子は全国に散つて、各地で果実を結びつつあることは、恐らく何人も否定し得ない事實であろう。無教會主義はブルンナー教授に教えられるまでもなく、平信徒伝道以外に進むべき方法を持たないのであるから、何人にも任命されず、何人にも試験されずに、ただ信仰によつて内心に湧き上がる伝道心から、やむにやまれず進んで伝道に従事するようになつているのである。

「教會には監督があり、牧師・長老があり、神学校があり、信仰箇条があるのであるから、その信徒が素人伝道をなしても脱線することがないが、無教會にはそれらのものはなく、また何人も他人の自由の伝道を引き留める力がないのであるから、非常に突飛な、誤謬に充ちた福音が宣べ伝えられ、眞の福音が歪められるおそれはないだろうか」ということは、何人の心にも一応浮ぶことであろう。

しかるに事實はこれと正反対であり、無教會主義の平信徒の信仰は、教會制度や礼典に関する無教會

特有の意見を除くならば、古い正統的信仰に最も近いものであり、そして各人全く独立、自由な立場に立つておりながら伝道の内容が、相互に非常に接近していることは、むしろ一つの驚異であるといふべきであろう。これをプレスビテリアンとメソジストまたは日本組合教會との間の相互の信仰内容の差異、更に進んで聖靈派と称せられる諸教派や、セブンスデー派・モルモン教等の信仰との差異に比べたならば、全然比較にもならないほどの一致があることを知るであろう。否、メソジスト派や、組合派内部での信徒相互間の信仰の内容が非常に種々雑多であるのももちろん、カルヴィン派内部にすらこの事實があるのと比較したならば、無教會者の間には不思議にも信仰の内容の差異が、たといあるとしてもほとんど言うに足らない程度のものであることは、公平な判断力をもつていゝる人であるならば認めうることであろうと思ふ。

それ故、一見統制力があり一致があるように見える教會的平信徒の伝道に比し、無教會流の伝道はかえつてパウロのいわゆる「異なる福音」(ガラテヤ一・六)を宣べ伝える危険が非常に少ないことは、特に注意しなければならぬ事實である。



かかる結果を生じている理由は、大体左の諸原因に帰することができると思う。

第一は、信仰のみによつて神に義とせられたという福音的信仰が彼らを動かしているからである。自ら進んで伝道すること、殊に何人から俸給を貰うのでもなく、何人からも褒められるわけでもなく、むしろ自分の職を抛ち、俸禄を棄て、またはそれらがある程度まで犠牲にして伝道をするということは、この信仰による根本的回心を経験することなしには容易にできないことである。そしてこの回心の経験さえ与えられ、新しい生命に甦つたものであるならば、別に神学校に学ばず、信仰箇条を教えられなくとも、皆霊による一つの信仰に立つことができるのである。

第二に、無教会の伝道は聖書、しかもこの全体を神の黙示と信じ、これによつて伝道することが、その一致を来たす主要な原因であると言うことができる。無教会主義には教会規約もなく、信仰箇条もなく、監督も牧師も神学校もない。自然彼らは聖書そのものの中にすべての真理を見出そうとするのである。そして聖書が一つの霊によつて書かれたものである以上、そこに霊的一致を見出しうるといふこと

は、極めて当然のことであるといわなければならぬ。

以上のごとき理由により無教会主義には平信徒伝道・素人伝道以外に途がないのであつて、そのみが福音を広める唯一の手段方法であるだけに、何人にも妨げられず自ら進んで伝道に努力している信徒が非常に多いことは、著しい世界的事実であると言つても過言ではないと思う。私自身各地に伝道して、いたるところに無教会的集會が営まれているのに驚くのであるが、先日熊本市の手島郁郎氏の発行する無教会雑誌「生命の光」の表紙に出ておつた紹介だけによるも、九州一円に一八か所に無教会的集會があるとのことであつた。全九州に一八か所では決して多い数ではないのであるが、しかし今後かかる集會がますます増加してくるの形勢は、明らかに看取することができるのみならず、全国的に調査したならば、恐らくその総数は相当のものであるうと思う。これが日本の福音化に貢献していることは否定し得ない事実であらう。

殊に注目していることは、これらの集會相互の間、何等公的な連絡とかまたは制度的規約などが存していないにもかかわらず、それらの間に自然に

信仰による友情が生まれて来る場合、極めて親密な愛の結合ができ、互いに相訪問し相助力するという事実が存在しているということである。初代教会における各地の教会相互の間もこれに似た現象であったように思われる。

しかのみならず、前述のようにこれらの集会において述べられる福音の内容―これが最も重要なことであるわけだが―は聖書中心の十字架の福音である点において、平信徒伝道の最大の弱点と考えられる部分が克服されていることは、喜ぶべきことであると思う。そして将来もますますこの点に力を注ぐべきであろう。平信徒伝道の必要がブルンナー教授によつて唱えられたのは、恐らく教会の、またその牧師の伝道があまりにも無力であるからであろう。しかし無力な牧師に養成され、聖書の真理が徹底的に教えられず、理窟っぽい神学論や、社会改良主義や、ヒューマニズムを神の名において唱えるものや、甚だしきに至つてはコミュニズムと合併したようなキリスト教を唱える牧師に教えられた信徒が、果たして有効な平信徒伝道ができるかどうかはかなり問題であると思う。

元来が平信徒であるわれわれにとつては、平信徒伝道はそれ自身信仰の果実であり、そのままわれらの生命であることはまことに力強い事実であり、今後ますますこの方面にわれらの力を注ぐべきである。かくして無教會的伝道によつて播かれた種子が全日本に深く根をおろすようになるならば、無教會的信仰がやがて全世界に第二の宗教改革を来たらしめるに至るであろう。

(『永生』二二三号、一九五〇年二月)